
ピエロの話

滾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピエロの話

【Nコード】

N6999A

【作者名】

滾

【あらすじ】

ある街に訪れたサーカス団。そこに現れた街一番の美女。ピエロは回ってくる“順番”を待ち、そして最後に・・・。

さあさあ。

今日も楽しいお話が始まるよ。

今日お話しするのは、とあるサーカスのピエロのお話。

いつもはみんなを笑わせてくれるピエロの、

悲しい、

或いは嬉しい、

或いは恐ろしい、

そんなお話。

さあさあ。

早速、楽しいお話の始まりだ。

とあるサーカス団が、とある街へやってきた。

なんてことのない、小さなサーカス団。

団員は少なく、団長を含めて五人だけ。

それでも連日のようにお客は押し寄せて、無口なピエロの芸、その他の団員たちのパフォーマンスに心躍らせた。

ピエロは微笑みのメイクを浮かべて、ただ物言わずに芸をする。

そんなピエロを、客は笑った。

だからピエロは、もっと芸をする。

ただひたすら、芸をする。

ある日、この街で最も美しいとされる女性がサーカスを訪れた。
サーカス上がりで疲れた団員達も、疲れを忘れたかのように女性を
囲んだ。

笑う彼女。

笑う団員達。

メイクで笑うピエロ。

本当に笑っているのか、それともメイクだけが笑っているのか。
解らないが、ピエロは彼女を見つめていた。

団員達に囲まれて微笑む彼女を、
遠くからそつと、
見つめていた。

今日も彼女はサーカスを訪れた。
我先に、と団員達が駆け寄る。

その中で今日は、一人の団員が彼女と街へ出かけて行った。
それを、ピエロは見つめていた。
遠くからそつと、
見つめていた――

ピエロは今日も芸をする。

ナイフを両手に、ジャグリング。

誰もいない会場の中で、誰にも見られずジャグリング。

彼女を待っているわけではない。

彼女が来ないのも解っている。

笑うピエロ。

笑うメイク。

実際笑っているかは解らない。

それでも、

ピエロはひたすらジャグリング。

舞うナイフ。

微笑むピエロ。

夜が更ける。

ピエロは団員を追いかける。

両手にナイフを舞わせながら、

徐々に、徐々に、

確実に団員を追いかける。

踊るピエロ。

舞うナイフ。

微笑むメイク。

ピエロは高々と、月明かりに映えるナイフを掲げ

ナイフは朱に染まる。

団員が一人減った。

それでも今日も、彼女はやって来る。

団員達は団員が減ったことも忘れて彼女に駆け寄る。

笑う彼女。

見つめるピエロ。

今日も彼女は、一人の団員と街へ消えた。
見ていた。

ピエロはちゃんと、
そつと、遠くから。

ピエロは今日もジャグリング。
鉄球を両手にジャグリング。
誰もいない会場で、いつものようにジャグリング。

微笑むピエロに、
舞う鉄球。

そして今日も、夜は更ける――

今日もピエロは、団員を追いかける。
逃げる団員を、鉄球を舞わせながら追いかける。
笑うメイク。

今ピエロは、笑ってない。
ただ、メイクがひたすら微笑むことしか許さない。
だから今日も、ピエロは笑う。
鉄球を、月の光に輝かせながら掲げ――

鉄球が、朱に染まる。

今日も団員が一人減った。残り一人の団員。
それでも今日も、彼女はやって来る。
一人の団員はもはや歩いて彼女の元へ。
ピエロは、勿論見ていた。
微笑を絶やすことなく、遠くからそつと。
そして今日も、彼女は団員と街へと消えた。

ピエロはひたすら玉に乗る。

バランスをとって、一生懸命玉に乗る。

誰もいない会場で、当然のように玉に乗る。

微笑むピエロに、

転がる玉。

微笑むメイクを浮かべて、今日もまた、夜が更ける――

いつものようにピエロは、団員を追いかける。

逃げる団員を、微笑みながら追いかける。

バランスをとって、玉に乗りながら。

もはや笑うことを決定されたメイクを浮かべて、

しかしその目は、漆黒の闇によく映えた。

微塵も微笑を浮かべていない目。

それでも笑うメイク。

玉は鈍く月の光を反射して――

玉は、朱に染まる。

団長はどこかに逃げて、サーカス団は姿を消した。

彼女ももう来なくなった。

それでも、ピエロはひたすらジャグリング。

ナイフで、鉄球で、

誰も入らなくなった会場で、ただひたすらに玉に乗ってジャグリング。

朱に染まったナイフと鉄球と玉。それらはひたすら舞い、または転

がる。

彼女は来ない。

待っているのに、来ない。

今度は自分の番じゃないのか？

ピエロは微笑みを称えたメイクを被り、
ただ沈黙の下、夜は更ける――

ピエロの中に、ある曲が流れる。
リスト作曲の、“ラ・カンパネラ”。

悲しい、そんな感じがする曲。

玉に乗り、ナイフと鉄球でジャグリングしながら、ピエロはその曲
を思い出す。

ピエロが、静かにパフォーマンスをしている。

ピエロの頭の中では、そんなイメージが映し出される。

悲しみの中で、
芸をするピエロ。

なぜ彼女は来ない？

何故、自分は一人だ？

ピエロはひたすら、追いかけた。

「来ないで」

何故否定する？

今度は、僕の番だろう？

逃げる彼女を、ピエロは追った。

叫ぶ彼女。

追い詰めるピエロ。

微笑むメイクに、
微笑む目。

ああ、と、ピエロは息を漏らす。
朱に染まった“それ等”を掲げて――

さらに、“それ等”は朱に染まった。

ピエロはひたすら玉に乗ってジャグリング。
誰も来ない、一人ぼっちの場所で、ひたすら一人で芸をする。

一人？

ああ、違った。

彼女がいる。

僕は一人じゃない。

ピエロは微笑を称えたメイクを被り、
そして、やはりピエロ自身も笑顔だった。

何故なら、彼女がいるから。
一人じゃない。

彼女は、ここにいるよ。
カノジョハ、ココニイルヨ――

ピエロはひたすらジャグリング。

玉を操作し、ナイフを宙に舞わせ、鉄球を手でキャッチする。

いつまでも、ピエロは芸をする。

彼女のために、芸をする。

悲しくない。

彼女の血で染まった服が、そう告げる。

ああ、悲しくない。

だって、

カノジョハ、ココニイルヨ――

夜は更ける――

さあさあ。

楽しかっただろう？

ピエロのお話。

悲しい、

或いは嬉しい、

ピエロのお話。

いつかサーカスがあなたの街へ訪れたとき、

その時は――

（後書き）

自分で書いてて意味が解らなくなりました。

作中に書いてありますが、ラ・カンパネラというピアノの曲を聴いてて思いついたネタです。

楽しんでいただければ、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6999a/>

ピエロの話

2010年11月30日04時18分発行